

姿もあり、馬もいて人の動きも活発で、どうしたことだろう、敵が降伏してきたのか、きっとそうだろう。日本は勝ったんだとまだ寝ていた戦友たちを起こした。みなキツネにつままれたような不思議な光景を見ていたが、どうも様子がおかしい。敵も昨日あたりから全然撃ってこない。そうこうしているうちに、日本は負けたりしいとヒソヒソ話が伝わってきた。そのうち伝令が来て「日本は戦争に負け、八月十五日終戦の詔勅が出された」とのこと。そんなばかなこと、戦争は始まったばかりでこれからだと半信半疑で憤慨していると、一時間以内に武器を捨てて山の下に集合せよとの命令が出た。ボヤボヤしていると、後方の陣地から丸腰の兵隊が陣地を捨て、おりて行くではないか。これは大変、本当らしい、早くおらないと一斉射撃を受けるとの情報も入り、あわてて身のまわりの日用品だけまとめて山を降りた。

短い戦争はこうして終わり生命は助かったが、これからどうなるか全くわからず、捕虜となって銃殺かそれとも日本に帰れるか判断がつかない。山の下の広場に一個大隊以上の人間が集まる。ソ連兵が自動短銃を小わきに

抱え、我々の集団を取り囲み、まだ武器を持った者に中央の一所に、まきを積むように積み重ねるように命令し、本当に丸腰になってしまった。それでも将校は帯刀を許されたようだ。そして、数時間たち各中隊の集結が完了し出発ということになった。それまで待機していたソ連軍の戦車、トラック、装甲車等はドンドン孫呉方面へ進んで行く。将校はトラック、我々は徒歩でどこへ連れてゆかれるかわからない。警戒兵の自動小銃に威嚇されながら行軍して孫呉に着き、関東軍が備蓄した軍需物資を本国へ輸送するための貨車積み込み作業を約一か月間やらされた。そして、十月上旬ポツポツ寒さがくるシベリアへ連行され、苦しい抑留生活が始まる。

乏しい食糧

熊本県 高瀬潤 吉

入所した最初の冬は、抑留者にとって最悪の年であった。体験したことのない厳冬、乏しい食糧、そして重労働

働。これらの悪条件が重なり合いながら私ら抑留者に襲いかかってきた。

戦争が集結したとはいえ、多くの国が食糧難の中にあり、特にシベリアは食糧の自給は不可能な立場にあり、食糧事情が厳しかったことは言うまでもない。そして、その中でもまた地域によってかなりの差があったように思う。後でわかったことだが、党本部あるいは軍司令部のあるような大都市圏周辺の食糧事情はまあまあであった。不幸にも私のいたナリームは軍司令部のあるチタマで車で一昼夜もかかる山の中である。

私たちの食糧は週に一度か十日に一度かわからないが、チタマでトラックで受け取りに行く。それには警護のため二、三人の歩哨が同乗して行く。帰りは途中で一泊しなければならぬ。その一泊する集落で歩哨が遊んで帰る。その遊びの代償は私らに割り当てられた食糧でまかなわれていたのです。（このことは、後で司令部の調査で判明した）従って、ナリーム収容所の食糧情報は、ほかに比べて極端に悪かったわけである。

老軍医

あまりにも多くの死者の統出に驚いた司令部は、私たちのナリーム収容所へ老軍医を派遣することになった。その軍医による健康診断の結果、重症者は周辺の病院に転送させた。その数三百数十人。入院とまでいかないが現地で休養させた者約二百人。（練成班と言った。私はその中の一人）なんと働ける者百二十人という結果であった。

残念なことは、時すでに遅く帰らぬ人となり、ナリームに眠る方々は三百六十余人である。病院に転送された重症者の中にもすでに手遅れという人たちもかなりあったのではなからうか。この方々を合わせれば実に半数近い方々が帰らぬ身となられたものと思われる。二十歳から三十歳ぐらいの働き盛りの人たちが、栄養失調で毎日々々死んでゆく。いかに食糧が乏しかったか。心ない歩哨の行爲と、自己栄達のために、抑留者の体力も考えず、ダワイ、ダワイと叫んで山を駆け回った。若い収容所長たちが、ノルマ主義のためにいかに私たちに過酷な労働を強要したか、絶句するものがある。

練成班では、一か月の休養と栄養食によってすっかり

体力が回復した。同時に気候も春に向かいつつあった。

老軍医は、同時にシラミとの闘いを展開した。宮庭に地下入浴場をつくり、隣合わせに衣服の煮沸所と、余熱を利用した衣服の乾燥場を設置した。入浴が終わった者はしばらく待てば煮沸した自分の衣服を着ることができた。このようなことを数回繰り返しているうちにシラミは全くいなくなった。見事としか言いようがない。みんなが老軍医に対して敬愛の念を抱いたことは言うまでもない。通訳の話では、この老軍医は以前、佐官級の時代に軍司令官とけんかをして中尉に格下げされた人だということだった。零下十六度を超したある朝、ソ連人は作業（伐採）をやらせると言って私たちを宮門前に整列させていた。そこへ老軍医は零下六十度を超えているので仕事に出してはいけないと言っているということだった。結局、ソ連人は不満げにつばを吐いてどこかに立ち去ってしまった。ソ連軍中にも、老軍医のような人道主義者がいることも事実である。この老軍医に幸多かれと祈らずにはおられない。

働かざる者

ソ連人の訓示の第一声は決まって「働かざる者食うべからず」である。このことからしてもソ連がいかに食糧が不足している国かがうかがわれる。食糧が豊富であれば、このようなことを言っても通用しない。面白いことは彼らは、人間の本能は三ツあり、その一つの食うことと並んで働くことをあげている。働くことを人間の本能と結びつけていることは、まさにソ連流であり、当時ソ連人はそれを信じていたように思う。

伐採で切り倒した松のうら枝など、害虫防除のためみな焼却しなければならない。山ほど積み上げたうら枝を燃やしながらみんなで遠巻きにして暖を取った。休憩時には火にあたりながら共產主義の悪口などを話し合った。こんなとき、ソ連の作業員は、あたりを見回し、ソ連の同士が近くにいないことを確認すると、私らと一緒にあって、このような悪口を言ったり、グチを並べていた。彼らの昼食もまたジャガイモ二個であった。それを燃え残りの火の中にほうり込んで食べていた。